?神葬?

ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
？神葬？

【Ｎコード】
Ｎ０８７３Ｚ

【作者名】
ましろ

【あらすじ】
はじめての投稿です。アドバイスいただけたら嬉しいです。
（あらすじ）
神隠しにあい、異世界に連れていかれた幼馴染の長門美春を助けるため…そして姉を守るために異世界に自ら旅立った主人公、財部要。
彼を待っていたのは神葬と呼ばれる神々と殺し合うゲームだった…。
能力を使い神と闘う高校生たち。
彼らは無事生きて帰れるのか…
そして神葬の本当の目的とは

第０１話：少女（前書き）

はじめての投稿です。
アドバイスや、感想いただけたら嬉しいです。
場面が変わる時は◆を使います。

第01話：少女

ジリリリ

「…朝か。」

部屋に目ざまし時計の音が響く。

「うるさー……い！」

手探りで何とか探し出し無事止める。

「あと5分は寝れるな…」

と、布団をかぶり夢の世界へ旅立とうとした時

「とうっ！」

「げふっ！…ねえちゃん！？」

「いつまで寝てるの！起きなさい！」

ちなみに、家のねぇちゃんは笑顔で暴力をふるう人だ。

「おはようのぱんち☆」

「いやいやいや！」

「起きないともう一回ぱんちぃーしちゃうぞ？」

「起きます！俺マジで起きます！これでもかってくらい起きます！」

「よろしい。」

「たっく…ない胸張っても…ひでぶ！」

「何か？」

「何も…。」

ちなみに家のねえちゃんは貧乳だ。

「…痛い！……え！？なんで叩いたの？」

「心の声が聞こえた。」

お前はどこの老師だよ…。

と心の中で毒を吐きつつ準備をする。

「じゃぁ…行ってくる。」

「行ってらっしゃーい」

「まったく…なんでいつもいつも『ぱんち☆』するかな…」

「愛…じゃない？」

「愛か…ってうわ！」

俺の横にはいつのまにか、長門美春（ながとみはる）通称『みはるん』がいた。

「どうしたんだい？なんて」

「おま…いつから。」

「私はいつでもいるよ？」

「…。」

「なんて…ね。ついさっき君が見えたから時速８００ｋｍで来たんだ。なんて」

「時速は置いといて…どうりでリボンがちゃんと無すべてないわけだ。」

どうしてみはるんが俺が見えたかというと。

実は家が隣同士で幼馴染だからだ。

「え！？嫌…みないで…」
「おい…誤解されるから止めろ。」
周りのおばさま方がこっちを見ている
「なんて…ていうか今日やけにパトカー多くない？」
「うーん…確かに。」
「だよねー。…おまわりさーん！こいつロリコンですよーー！」
「お願い！止めて！マジで！嫌…本当にマジで！」
あ、やべ…。
警察来た。

◆

「キャハハハハ！」
「笑い事じゃないから…。」
「キャハハハハハハハハハハハ！死ぬ！死ぬ！！」
「笑い事じゃないから！！マジで！」
あれから俺は警察に軽く２０分くらい話を聞かれた。
「て…言うか…みはるん。逃げるなよ。」
「キャハハ！」
少し話していると、ガララ…
と音を立てて担任が入ってきた。
「えー……今日は…もう帰っていいぞ。」

「よっしゃ！！」
「え、何でですか――！？」
誰かが担任に聞いた。
いや…俺だって疑問だけど、帰れるなら万歳。
「あー…このごろあるだろ…神隠しって言う事件。」
神隠し、最近ニュースになっている事件だ。
なんでも全国の高校生が突然行方不明になっているらしい…って、まさか。
「…我が高校でも神隠しにあった生徒が出たため…今日はもう解参だ。気を付けて帰るように。」

◆

「怖いね…」
「あぁ。てか…腕さりげなく組むなよ。」
「あら嫌だ、私たち夫婦じゃない？」
「夫婦じゃない。」
「ほら、夫婦じゃない。」
「違うから！イントネーションが違うから！」
「キャハハ」
「…ん？何だあれ。」
おらたちの前方４～６ｍ
「なにあれ…。」

真っ黒なコート?を来た人が立っている。

「何だあれ…怖」

と、突然。

「!?」

こっちに向かって歩いてきた!

一歩一歩、ゆっくりと。

「……」

「?」

何かつぶやいている。

「長門美春さんですね?」

「え!?あたし!?そうだけど…」

「本人と承認しました…転送します…。」

いきなりみはるんの腕をつかんだ。

声からして男。

ではなく今大事なのは

「ちょちょちょちょ!!」

手をつかんだままぐいぐいと引っ張っていく。

って見守ってる場合じゃねぇ!

「おい!何やってんだよ!!」

男の腕を振り払おうと腕をつかんだが…。

「なっ…」

手が…腕をすり抜けた！？

「何だこれ…！」

「……！」

男は黙々と歩いて行く。

そして何もないところに手をかざし

「いぃ！？」

手を横に動かしたかと思うと今まで何もなかった場所にゆがんだ空間が現れた。

そしてそのまま

美春を引きずっていく。

美春は何か叫んでいるが聞こえない。

その顔には恐怖、不安…その他諸々負の感情が出ている。

「……」

もう一度俺は手を伸ばす。

そして、美春の腕をつかもうとしたが…。

「美春！！」

美春は男に引きずられ…、そのまま中に…。

「美春！！美春ぅぅぅぅぅう！！！！」

男と美春が入った後、あの異様な空間は消えてなくなった。

本当に、文字どうり…『消えた。』

「うぅぅぅ…くそっくそっ…うぅぅ…あああああ！！」

俺は悔しさとか悲しさとかいいようのない気持ちで泣き叫んだ。

第01話：少女（後書き）

少し長くなってしまいました。
書いてみて、主人公の名前が出てないことに気づいたので、本名を書きます。
主人公：財部要（たからべかなめ）

感想いただけたら嬉しいです

第０２話：再来

何分…いや、何時間か。
俺はいったいどれほど泣いたのだろう。

「……ただいま」
「ん～…元気ないね？」
「いや……大丈夫。」
「そう。ならよし。」

嘘だ。
本当は胸が張り裂けそうだ。
だけどいまだに信じられない。
目の前であんなことが起こる何て…。
俺は階段をのぼりながら考える。

「なんなんだよ…なんなんだよあれ…」

空をつかむ俺の手。
俺は確かに美空を掴んだ…。なのに。

「…。」

パソコンを立ち上げ、俺はあるキーワードを入力する。

『神隠し　行方不明　』
クリック。

「……。」

どのサイトでも同じような内容ばかり。
何の役にも立ちはしない…。

「美春…。」

自然と口から出てきた言葉。
美春との思い出が次々とよみがえる。
頬を何かが伝って落ちる。

「……涙…。」

気づかなかった。
俺はいつの間にか泣いていたのか…。
数分。
俺は調べていた。
神隠しと呼ばれる行方不明事件について。

「…ん？」
『神隠し　生還者の談』

何だこれ…。
俺はその言葉が気になり、クリックをしようとしたその時。

「きゃあああああああ！」
「！？」

一階からねぇちゃんの悲鳴が聞こえてきた
痛感を伴う悲鳴とは違う、恐怖、恐れ…そういった悲鳴。

「まさか…まさか…ねぇちゃん…！！！」

俺はドアを勢いよく開け、階段をまるで落ちるように走る。

「ねぇちゃん！！」

居た！

キッチンにねぇちゃんと、見覚えのある格好。

真っ黒なコート。

間違いない！あの男だ！

「ねぇちゃん！逃げろ！！！」

男がねぇちゃんに歩み寄る。

ゆっくりと…。

「いや…来ないで…」

「……。」

男は無言で近づき、ねぇちゃんの手をつかもうとする。

俺の脳裏にあの時のことが浮かぶ。

神隠しの扉があき、美春を連れていかれ

何もすることができないまま、泣き叫ぶ俺。

「う……うっぉぉおおおお！！！」

「……！！??」

気が付いたら殴っていた。

自分の意思というよりは反射。

とても…とても危険な反射。
男は派手に吹っ飛び食器が散らかる。
が今はそんな場合じゃない。

「ねぇちゃん！！こっち！！早く！！」
「う……うん…！」

俺は男が倒れている間にねぇちゃんの腕をつかみ走り出す。
玄関を飛び出し。走る。
どこに逃げればいい？
あの男から逃げるにはどこに…！

◆

要と姉、千華（ちか）が逃走した後のキッチン。
倒れたままの男のそばに、一人の女が立っていた。
手には何か書類を持っている。

「……貴方とも在ろう御方が人間ごときに負けるなんて…、いったい何があったんですか？」

倒れたままの男は上半身だけ起こし、答える。

「何も……それより」
「それより？」
「殴られた」
「え！？……そんなはずは」
「本当だ。」

「……まさか…彼が？」
「まさか。かもな……」

少し、間を置き。男が続ける。

「プレイヤーを増やそう。」
「ふふ…。財部要…ですか？」
「あぁ。」
「面白くなりそうですね。」

第０３話：情報（前書き）

ちなみに今話の時間帯は昼の３時くらいです。

第０３話：情報

「コーヒーでいい？」
「うん…ありがとう。」

男が家に来てから俺とねぇちゃんは家を飛び出し、近くのホテルに泊まっていた。
金は途中のコンビニによっておろしてきた。
俺の貯金はほとんどなくなったが今はそんなことを言っている場合じゃない。

「……助けてくれて…ありがとう。」
「うん。…無事でよかった。」

ねぇちゃんからもらったコーヒーを一口飲む。
暖かい…。

「あの…」
「？」
「あの男の人は……誰なの？」
「俺も、分らない…。ただ。」
「？」
「……あの男のせいで、美春は神隠しにあった。」
「え！？」

俺はそのあとねぇちゃんに全てを、見たまま話した。
美春が連れていかれたこと、俺が何もできなかったこと。

「…そうだったんだ…。」

「うん…。」
「疲れちゃった…、寝るね…。」
「うん。」
「あ」
「？」
「襲っちゃ、ダメだぞ！」
「分ってるって！」
「ふふ…おやすみ。」
「おやすみ。」

早くも寝息を立てて寝ている。
早い。恐ろしく早い。

「そう言えば…」

俺はあることを思い出し、携帯を取り出した。
部屋のパソコンで見たとある記事。
『神隠し　生存者の談』

「…あった。」

見つけた。このサイトだ。

「…。」

俺は読み進めて行く。

「……」

最後まで読むといろんなことが分った。

１つ目、生還者は現在４名
２つ目、内わけは男２人女２人
３つ目、内２人はまた行方不明に
４つ目、１人は死亡
５つ目、女１人は生きている、正常な神経
そして最後に、大事なことが。
生き残ってる一人がこのホテルから駅２つ分なのだ。

「……行くか。」

俺は紙に
『とある女性のところに行ってきます。夜には帰ってきます』
と書き、荷物を準備し、部屋を出た。

「待ってろよ……美春…。今助けてやるからな…。」

第０４話：訪問

「ここか…。」

手もとの紙と見比べ、確かなことを確認する。

「よし…。」

インターホンを押す。
ピンポーンと聞きなれた音がし、しばらくして一人の女の子が出てきた。
俺と同い年くらいだろうか。

「はい、何ですか…？」
「あの…、氷室雪（ひむろゆき）さん…ですか…？」
「そうだけど…何？」

出てきた女の子は髪が長く、メガネをかけていた。
クラスの委員長的イメージだ。

「……神隠しについて…聞きたいことが。」

神隠し、という言葉を聞いて、氷室の表情が変わった。

「へー…君も茶化しに来たの？私、そういうの興味ないんだ。じゃぁね。」

そういってドアを閉めようとする。

「ちょっ！待って！！」

間一髪、ドアの間に手を入れ、それをふさぐ。
が、お構いなしに彼女はドアを閉めようとする。

「痛っ…！たのむ…！俺の友達が連れていかれたんだっ・・・！」
「…あら。ごめんなさい。そうだったの」

そう言ってドアを緩めてくれた。
が、俺の手は赤くなっている。
痛い。

◆

「じゃぁ…そこに座ってて。紅茶でいい？」
「あ…あぁ。」

しばらくして、二人分の紅茶を持ってきた彼女は開口一番こう問いかけてきた。

「貴方も…いえ、あなたのお友達も男に連れていかれたの？」
「え！？なんで…それを……。」
「ならもう死んでるかもね。そのお友達。」
「はぁ！？」
「これは冗談でも、脅しでも、からかいでもなく。本気。あの世界じゃぁ人間なんて簡単に死ぬの」
「あの…世界。」
「そう、私が連れていかれた世界…。そうね…まずは順を追って説明するわ。」

◆

五分か、十分くらい。
氷室の話を聞いていた。
氷室の口から出てくる言葉はとても信じがたい言葉だった。
まず。
「その…『神葬(しんそう)』って言うのは…？」
「言うならあそこで行われるゲーム。お友達もきっと…いえ、絶対参加してるわ。」
「『神葬』って何をする…ゲームなんだ？」
「文字どうりよ、神を殺すの。」

そう言って俺に金属でできたプレートを一枚見せてきた。
何やら文字の形だ。

「読める？」
「いや…。」
「『氷』よ。あっちの世界では一人一人こういった漢字のプレートが貰えるの。」

氷室が言うには、異世界に飛ばされた後、空にパソコンのウィンドウが現れて、こう書かれるらしい。
『生き残るための漢字を空に書き、唱えよ。さすれば神を葬る力が与えられる。』と。

「それで…『氷』？」
「そう、その時は何書いていいか分らなかったから…私の苗字、氷室から氷をとったの。で、このプレートを身につけていると。」
そう言って紅茶がまだ入っているコップを一旦持ち上げ。

「たとえば…こんなこともできるわ」
「え！？」
コップを逆さにし中の紅茶をこぼす。
が、中にあった紅茶は決して流れることがなかった。
「え…なんで…。」
「ふふ…。答えはこう…。ね？不思議でしょう？」
そう言って俺にコップを渡してきた。
見ると、さっきまで液体だった紅茶が固体…つまり、氷になってたのだ。
「紅茶の氷の出来上がりよ。」
「す…すげぇ…。」
「……さっき、私がお友達はもう死んでる…って言ったでしょう？」
「あぁ。」
信じたくない…。
そんなことは信じたくなかった。
「神様は…あなたが想像しているよりも、邪悪で最悪で凶悪で横暴で粗暴で……人間がこんなちっぽけなプレートでかなうほど弱くはないのよ」
そこまで言ってこう続けた。
「私が言えることはこれくらいかな。……じゃなかった、まだあった。」

おい！
と心の中で突っ込みを普段なら入れるのだが、今はそんな場合じゃない。

「あっちに行ったらミッションがあるの…それを規定数クリアしたら…こっちに戻ってこれる。…がんばってね。生きて帰ったら…またおいで。」
「あぁ…絶対…帰ってくる。今日はありがとう…。」
「いえ。」

◆

氷室に別れを告げ、俺は駅で電車を待っていた。

「あと…6分か。」

思ったより早かった。
なんてことを考え、今日あったことを思い出していた。
いろんなことがあった…。
美春…待ってろよ…俺が絶対助けてやる…！

その時、俺の後ろから声がした。
『あの』声が。

「財部…要さんですね？」

第０５話：旅立（前書き）

この話で第1章完結します。

第０５話：旅立

もしかして…あの男か！？
と、思い俺は振り返る、が

「…え？」

俺に声をかけてきたのは一人の女性だった。

「はじめまして。……ところで、単刀直入何ですけど。」
「ん？」

笑顔で、こう続けた。

「異世界に行きませんか？」
「なっ！？」

この女…笑顔で…というか。

「あの男の…知り合いか…？」
「えぇ。まぁ…あなたが行かないというのなら」
「行かないなら？」
「貴方のお姉さんが参加されるだけですが…。どうしますか？」

ニコッと笑顔で問いかける女。
が、その内容は真逆。

「てめぇ…ねえちゃんに…」
「手なんか出しませんよ…。それに、我々としてもあなたが参加し

た方が面白そうなのですが…、どうしますか？嫌ならいいんですよ。
お姉さんが死ぬだけですから。ふふっ。」

くそっ…！
くそくそくそ！
そんなの俺に選ぶ権利なんかないじゃないか！！

「悪魔め…」
「悪魔じゃないです…。それにどっちにしろ行くつもりだったのでしょう？」
「…本当にねぇちゃんは無事なんだな…？何もしないんだな…？」
「えぇ。我々は約束を守りますよ。」
「くそが…。」
「何とでも…」

女が右手を掲げ、パチンッ…。
その瞬間。

「なっ…！！？？」

俺と女以外全ての人間の動きが止まったのだ。
まるで、彫刻か、蝋人形のように…。ピクリも動かない。

「ふふ…これが神の力です。…ではこちらに。」

そう言って女も男同様何もない空間にあの扉を作った。

「一つ…頼みが…。」
「何でしょう…？」
「ねぇちゃんに…絶対生きて帰ってくる…そう伝えてくれ。」

「はい。…では」
「……。」

俺は自ら歩を進め、あの異様な空間に入っていく。
日常と非日常が交わるこの空間。
一度はいれば簡単には出られないだろう…。
だが、俺は行くしかない。
行かなければならない。
美春を…。そしてねぇちゃんを守るために…。

◆

要が異世界へ旅立ち、扉が閉じられる。

「ふふ…。生きて帰ってくる…。ですか…ふふ」

第０６話：幻狼（前書き）

この話から第２章が始まります。
アドバイス、感想いただけたら嬉しいです。

第０６話：幻狼

「ん…」

ここは…？
辺りを見渡す。
さっきまでいた駅とは明らかに違う。
というか此処…日本か？
俺が目覚めた場所は草原。後ろには森。
こんな場所が日本なわけがない…ということは…。

「ここが…異世界…。神葬の…世界。」

おれ以外にも数人…、いや数十人高校生が居る。

「…そうだ！」

俺は美春を捜しに来たんだ
こんなところでぼーっとしてる場合じゃない！

「すいません…長門美春っていう人…知りませんか？」

俺は取りあえず一番近くに居た人に声をかけた。
が…。

「さぁ……分らない…。」

そのあとも全員回答が同じ…。
予想はしていたが…。やはり。

「本当に…死んでしまったのか…」

いや…。そんなはずは…。

それから数分たったころ、空に何かが現れた。
巨大なソレはまるでパソコンのウィンドウ…。
3次元の世界に2次元が…。
奇妙だ…。

「なんだあれ!!?」「ウィンドウ…?」「なんだよれ…」

皆同じような声を出してる…。

「あれか…。」

氷室が言っていたウィンドウ…。
てことは…。

『ようこそ。神葬の世界へ。プレイヤーの皆さまにはこれからミッションをクリアしてもらいます。』

「なんだよ!神葬って!」「ミッション…。」

一旦書かれた言葉がすべて消え、そして新しい文章が出てくる。

『この世界で生き残るための漢字を地に書き、そして唱えてください。そうすれば…あなたに素敵なプレゼントが。』

あれ…空じゃなくて、地面なのか…?

まぁいい。
漢字…。
俺は氷のプレートを思い出す。
この世界で生き残るためにはどんな漢字が良いんだ…。

「…。」

俺はしばらく悩む。
だめだ…。思いつかない…。
焔？剣？
どうやったら…美春を探せるんだよ…。

「…探す……。」

そうだ…。
俺の目的は美春を探し、無事生きて帰ってくること。
それが第一。

「よし…。」

俺は地面に『探』と書く。
なんて読めばいいんだ…？
さがす？たん…？
ええい！
どっちでもいいだろう！

「た…たん」

その瞬間。

「なっ！？」

一瞬地面が輝き…そして。
光の代わりに出てきたのが。

「これが…」

俺はそれを手に取ってみる。
ブロンズ色の軽いプレート。

「俺の能力…。」

辺りを見渡してみるとおれ以外にもすでにプレートを手にしている人は結構いた。
皆ブロンズ色だ…。
氷室のは確か…白だったけ…。
なにか違いでもあるのか？
なんてことを思っているとまた文字が書かれた。

『プレイヤーの皆さまがプレートを得たので能力の使い方を説明します。そのプレートを身につけ、能力をイメージする…。それだけです。直接肌に触れている時のみ能力が発動可能ですので、お気をつけて。』

「なるほど…。」

イメージ…か。
探すってことは…ダウジングとかか？
それから数分たったころ、新たな文字が…。

が、その内容は今までとは違った。

『ミッション?1　フェンリルからの逃走／24h』

「フェンリル……ってなんだ?それに…24時間?」

俺がそんなことを考えてると誰かが声を上げた。

「おい!!!なんだあれ!!!なんか出てきたぞ!!!!」

短髪の男が指差す先には黒い影。
地面に出ているその影は丸で水たまりのように波紋ができている…。
そして…

「なんだよ!なんだよあれ!!」

その影から…
1メートル50センチくらいか…。
巨大な、狐と犬…そして狼を合体したような生物が出てきた。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

咆哮。

草を揺らすほどの巨大な咆哮…。

これが…俺の…。
いや…俺たちの地獄の始まりだった…。

第07話：悲鳴

「なっ…なんだよあれ…！」

明らかにこの世の生物じゃない！

明らかに近づいてはだめ！

「ん？」

誰か…近づいてないか…

「へっへー…俺の能力のいい練習台になってもらうぜぇーーー！」

一人の茶髪がフェンリルに近づいてる。

後ろを振り向き皆に手を振り。

「俺がぶっ殺すからな―！お前ろみとけよーーー！」

その右手にプレートを持ち、フェンリルに近づく。

フェンリルは何もしてないが…、明らかに獲物を見る顔だ。

「グルルルルルゥ……」

威嚇している。

が茶髪は気にせず突っ込む。

「おい！！馬鹿！！止めろ！！」

「んぁ？……ぐっ！？」

止めようと声を出したが無駄だった。
今までそこに居た茶髪の右腕が…右腕が。
「ギャアアアアアアア！！！！！！！」
右肘から先が無くなってる！？
その先はどこか想像したくないが…。
皆の視線がフェンリルに集まる。
「手が！！手が！！！俺の手がぁあああああああ！！！！！！」
フェンリルの口からはみ出してるあれは…。
「グルル……ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」
一際大きな咆哮を上げてのたうちまわってる茶髪にフェンリルが向かっていく。
俺たちはそれをただ見守るしかなかった。
「ひ…ひ…やめろ…やめろ…うわあああああああああ！！」
「……嘘だろ」
誰かが呟いた。
だけど、これは嘘なんかじゃない…。
現実だ。
今までそこに居た茶髪はそこになく…今はただ血だまりが…。
そこまで考えた時、俺は走り出していた。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」
後ろで咆哮が聞こえたが振り返ってる暇はない！
どこに向かって走ればいい！？
どこに逃げたら…どこに逃げたらアイツから逃げれる！！
俺は後ろにあった森に向かって走り出した。
無我夢中で走る。
おれ以外も…走り出した。
アイツから逃げるために。

「キャアアアアアアアアアア！！！！」

後ろで誰かの悲鳴が聞こえた。
だけど、俺の脚は勝手に動く。
見てる暇なんかない…。

◆

「はぁっ…はぁっ…何だよ…何だよあれ…」

数分走っただろうか、俺は一つの巨大な木を見つけ、隠れていた。

「くそっ…くそっ…くそ…俺は…俺はあの時…」

茶髪が前に出た時、何で止めなかった…。
氷室から聞いていたはずだ！
俺は止めれた！！
なのに…。

「ウワァァァアアアア！！！」「キャアアアアア！！」

「う……」
俺はたまらず吐きだした…。
知らず知らず涙が出てくる。
今でも悲鳴が聞こえてくる…。
耳をふさいでも、聞こえてくる。

「くそっ…俺だって…俺だって生きたいんだよ…」

大体…ミッションって何だ？
フェンリルからの逃走／２４ｈ

「フェンリルは…アレで間違いないはずだ…だったら…２４ｈって…。」

まさか…。
まさかまさかまさか

「２４時間…逃げ続けるってことかよ…。」

無理だ…。
あれから逃げるなんて…。

「キャアアアアア！！！！！！」

また悲鳴が聞こえてきた。
恐怖と不安で押しつぶされそうだ…
体が勝手に震える…。
今、何分たった…

ミッションは一体何分たったんだ…。

空は…まだ明るい。
てことは…１２時くらいか…。
後…１８時間くらいか…。

「……ねぇちゃん…ごめん。」

祝！２００アクセス

今日アクセス数見てみたら２００でした！
ＦＯＯＯＯＯＯＯＯ！
読んでいただいた皆さま、ありがとうございます。
こんな駄作を読んでいただけるなんて（涙）

はじめての投稿で正直不安でしたが、読んでいただけて嬉しいです。

文章は下手
誤字がある
脱字もある
分りずらい

などと…
いろいろ改善点がありますが、これからも一生懸命頑張って日々精進したいです。

アドバイス、感想待ってます。

これからも厨二病全開で行きます。
痛いだなんて言わないでください…

これからも神葬をよろしくお願いします。
（。・ω・）ノシ　ましろ

第０８話：具現

って…
何考えてんだ俺のばか…。
死ぬなんて…考えちゃだめだ！
生きろ…生きるんだ俺。
此処では本当に死ぬ…。
けど…生をあきらめるな…。

「生きて…帰らなきゃ……！」

美春を連れ戻し、ねぇちゃんに笑顔で『ただいま』
って言わなきゃならないんだ！

「よしっ…。」

生きるためには、まず。

「能力…か。」

俺はもう一度プレートをよく見てみる。
『探』これが俺の能力。
氷室の家で一度見た。だからこれが玩具じゃないことは分ってる。

「確か…。」

イメージ。そうだ、能力をイメージするんだ。

「探す…か……」

俺は目を瞑(つむ)り想像する。

「…はー…はっー…」

だめだ。
できない…。

「やめろぉおおおおおおおおおおおおお！」

「ひっ…！」

またどこかで悲鳴が聞こえてきた。
不安と恐怖で死にそうだ…。
だけど…だけど俺はこんなところで立ち止まってるわけにはいかない

「もう一度…。」

俺は地面に絵を描く。
その方が想像しやすいと思ったからだ。
けど。

「うわ…なんだこれ…」

俺が書いたのは〇の中に矢印がある絵。
コンパスのつもりだったんだが…

「まぁ…いっかよし…。」

俺はもう一度、想像する。

呼吸を整え、そして深呼吸。
鳥のさえずり…
草の揺れる音…
落ちつくことで、いままで聞こえなかったいろんな音が聞こえる…。

「……で…」

ある。
俺の右手には確かにソレがあった。

「できた…！できた…！できたぁあ！！」

俺は小さくガッツポーズをする。
ソレはコンパスだった。
ただ、他のコンパスとは違い、俺のは矢印が一つだけ。
その先っぽが今は動いてないが…。
きっと探したい人の位置を示してくれるだろう…。

「よし…美春の…美春の位置を…」

俺はどうしていいか分らなかった。
本当にこのコンパスが美春の位置を示すのかさえ分らない。
だが、今は小さな希望にかけるしかなかった。

「お…おぉぉ」

すこしずつ…少しずつではあるが。
今まで微動だにしなかった針が動きだした。
示す位置は俺の方向。

「え…てことは…。」

俺は後ろを振り返り、もう一度念じる。
嘘であってほしかった。
何せ、俺がさっきまで来てた道っていったら…

「……もう一度…行かなきゃだめだのか…。」

あの怪物が居る場所へ…。

「その前に…一度寝ておこう。」

周りを見ると空は暗くなっていた。
時計が…というか物が何も無くなっているから時間が分らない。
明日になったら、一日歩き続けよう。
今日はいろいろあったな…。

「待ってろよ…美春。」

◆

要がコンパスを具現化している頃、草原に一人の男が居た。
茶髪とは別のフェンリルに食べられた男。名前は木原結城

「…うっ！……っはー…はー…」

彼は生きていた。
いや、正確には『蘇った』

「よかった…『蘇』にしてて…」

細切れになった彼の肉体は少しずつ、少しずつ再生し、今に至ったのだ。

「……よし…この能力がある限り、俺は不死身だ…！」

笑いが止まらなかった。
狂ったように笑い続ける。
が、その笑いは一声で止まる。

「へー……『蘇』か…良い能力ですねぇ。」
「なっ…！？」

後ろを振り返る。
今まで誰もいなかったはずのそこに男が一人立っていた。
1年生くらいか…。身長は少し低い。
そして何より。
木原を驚かせたのは…

「ない…」

数分前まで確かに右手にあったはずのプレートがなくなっていたのだ。

「…あ、もしかしてこれ探してますかぁ？」

そう言って右手を差し出してくる。
その中には。

「てめぇ……！」

『蘇』のプレートが…。

「返せ！！！俺のプレートを返せ！！」

「返すわけないじゃないですかぁ」

「なっ…てめぇ…かえさねぇとぶっ殺すぞ！！」

「やってみたらどうです？」

「うおおおお！！」

右手を振り上げ、殴りかかる。

が…しかし。

「！？」

すり抜ける。

まるで霧を殴ったかのようにすり抜けた。

「何が起こったか分かりません？…実は…俺こーんなにプレート持ってるんですよねぇー」

そう言って目の前の男が両手を見せる、中には。

「な…なんだよ…これ…なんでこんなに…」

軽く6～8個のプレート。

木原には意味が分らなかった。

目の前の男がこんなに持ってる理由を。

「知りたいです？実は、皆が死んだあとプレートを集めて回ったんですよ…」

「何で…」

理由は…

そう言ってにやりと笑う。

木原は直感で感じ取った。

『俺も殺す気だ』と。

「やめろおおおおおおおおおおおおおお！」

「神を殺して新たな神になる。……それが皆を殺す理由です…。まぁ、聞こえてないでしょうけど。」

少年の言葉通り、木原には届いてなかった。

なぜなら

「『針』…なかなか言い能力だね。」

地面からのびた巨大な針が木原の体を貫いていたからだ。

体に巨大な穴をあけ、生きていられるわけがない。

いや…数分前までなら蘇れた。

が、今は違う。

「これで9個か…次はどんな能力かなー」

鼻歌交じりに歩きだす、その姿はまるで新しい玩具を探す子供のようだった。

第０９話：終了

嘘だ。
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ…。
俺は息を殺す。
嘘だ。
俺は現実を受け止めれなかった。
朝、目を覚ましたら…そこにフェンリルが居るなんて。
これはアニメや小説じゃないんだ！！
こんな展開が…。
嘘だ…。

「……。」

俺は腰を低くしたまま進みだす。
幸い奴は草の陰で俺が見えないらしい。
コンパスは消えているが、プレートがあるからまた出せる。
それよりも今はばれる前に逃げなければ…。

「グルルル…」

フェンリルは唸っている
大丈夫…
ばれてない。
ばれてないばれてないばれてない…。

「……」

後ろを振り返ってみる、大丈夫だ…。

こっちを向いてない…。
パキッ……
嫌な音が響く。
「……！」
ヤバい！
明らかに気づいた。
「くっそぉっ…！」
俺は立ちあがり無我夢中で走りだした。
「ウォオオオオオオオオオオオオオオオオウ！！！！！！！！！！！！！」
後ろで一際でかい咆哮が聞こえた。
だが
振りかえってる暇はない！！
「はぁっはぁっはぁっ…！！！」
こんな…夢だろ！
気づかれないように動いた瞬間気づかれる　って！！！
俺は走る。
走らなければ即死。
後ろから木をおりながら進んでくる音が聞こえる。

「はぁっはぁっ……うお！？」

何だ？

何かに躓いたのか俺は前のめりに吹っ飛ぶ。

「…痛っ！」

だめだ…脚が…

だけど…

俺は脚を引きずりながら逃げる。

逃げなければ…

「ヴォゥッ！！！」

「ぐあっ！」

なんだ！？

俺はまた吹っ飛ぶ。

今度は何かに躓いた感じはない…。

俺は後ろを振り返る。

そこには

奴が居た。

「グルルルルル……」

まるで獲物をいたぶるようにゆっくりと近づいてくる。

「う…うぁ……」

涙があふれ出てくる。

死にたくない…。

死にたくない
死にたくない死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
！！！

「うわあああああああああ！！！！！！！！！」

…おかしい。
俺は目を少しずつ開ける。

「え…」

俺は現実が飲み込めなかった。
何が起こったんだ…？
俺の目の前に奴はいなかった。
丸で本当に夢だったかのように…

しばらくすると空にあのウィンドウが現れた。
カタカタと…音を立てながら文字が書かれていく。

『ミッション？1終了。　死亡者数４３７人。生存者数２０６４人。
』

第１０話：帰還

空に浮かぶウィンドウには依然として文字が書かれている。

「死亡者数４３７人……」

自然と涙が出てきた。
これは何の涙だ…？
悔しさ？悲しみ？怒り？
死んでいった人のことを考えると涙が止まらない。
勝手にこんな場所に連れてこられてわけもわからないうちに殺されたんだ…。

「畜生…」

美春…
そうだ…美春！

「生存者数…２０６４人…」

この中に美春が居ることを願う。
俺には願うことしかできない…。

「待ってろよ…美春……。」

コンパスをもう一度出し、再び歩き出す。
フェンリルから逃げるためにがむしゃらに走ったせいで、俺が居る場所は分らないがこの針が示す場所に行けば大丈夫だろう…。
歩きだした瞬間。

カタカタと音がし、文章が再び書かれていく。

「何だ…？」

『第1回神葬　終了。能力について、他言禁止。』

「な…終了！？俺はまだ美春を見つけてないんだ！帰るわけには…」

その時、俺の目の前にあの扉が現れた。
時空をゆがませながら…
そして、中からあの女が出てくる

「いいえ。帰っていただきますよ。」
「…俺は……俺にはまだ探さなきゃならない人が居るんだ…。帰るわけにはいかない…」
「お姉さんがどうなってもいいのですか？」
「なっ…」
「帰っていただきます。」

俺に選択肢はなかった…。

「くそっ…帰ればいいんだろ…」
「ふふ…さぁ。こちらへ。」

女に手を出されたが俺はそれを無視して扉の中に入る
それが俺にできるせめてもの反抗だった。

◆

「ここは…」

俺が出てきたのはあの駅だった。
周りは依然と同様人がいる。
周りに居る人間を見ると涙が出てきた…。
安心の涙だ。

「俺は…帰ってきたのか…」
「おめでとうございます。」
「…何がだ……」
「何がとは？」
「何がめでたい！一体目的は何だ！何人死んだと思ってやがる！！」

俺は殴りかかる…、が。
またしても体をすり抜ける。
一体この女は何なんだ…！

「あら…あの人を殴れたのは偶然見たいですね…。」

そして、こう続けた。

「また来ます。……それまでお元気で。」

第11話：祝福

「……ん？」

俺はポケットに違和感を覚え、中の物を取り出してみる。

「ケイタイ……」

「そうだ！ねぇちゃんは無事か…！？」

確かに俺は神葬をクリアした…が、ねぇちゃんは…ねぇちゃんは無事なのか！？

俺は急いで番号を打ち、ねぇちゃんが出るのを待つ。

が、数分たっても出ない。

まさか…

「もしもし」

「もしもし！ねぇちゃん！無事…！？」

「無事…そんなことより早く帰ってきて。」

「…わかった。」

一方的に切られた…。

声からして明らかに怒ってる…。

それも当然か…

◆

「…ただいま……」

俺は怒られるのを覚悟し、扉を開けた。

が、結果は俺の予想をはるかに超えていた。
パーン！
と軽快な音がし、俺にリボンがかかる。
「え…」
見あげるとクラッカーを持ったねぇちゃんが笑顔で迎えてくれた。
「おっかえりーーー！」
そう言って俺に抱きついてくる。
「え…え…」
俺はまだ状況がよくわからなかった。
「さぁ！こっちに来るんだ！！」
そう言って一人キッチンに向かって走っていく。
胸のあたりを見てみると濡れていた。
ねえちゃん…。
◆
「じゃっじゃーーーん！」
キッチンに入ると豪華な食事がテーブルいっぱいに広がっている。
から揚げにお寿司、ジュースに…二人で食べきれないほどだ。
「これは…」

「おかえり。」
もう一度笑顔で俺に
俺も笑顔でもう一度
「ただいま。」
それから俺とねぇちゃんでご飯を食べた。
お寿司は俺が好きなネタがたくさんあって、中に数個下手なできのがあった…それはねぇちゃんが作ったものだったらしい。腕によりをかけたらしく、そのできは…まぁおいておこう。

◆

「俺、怒ってるのかと…」
「最初は…電話が来た時は怒ったよ？でも…そのあと女の人が来てね。教えてくれたんだ。」
「そう…か…。」
多分女って言うのは…、あの女だろう…。
そう言えば、名前知らないな。
別に知りたくもないが。
「ちょっとこっち向きなさい。」
「え？…痛っ」
ねぇちゃんの方を向くと思いっきりビンタされた。
意味が分らなかった…。
ただ頬が痛く、そこを抑えていると。

「…心配した。ずっと…ずっとずっと…ずっとずっと…ずーーーっと…心配してた。…もう行かない？」
「……それは…。」
「行くの…？」
俺が行かなきゃ…
美春を連れ戻せない…それに。
「俺は、行かなきゃならない。」
そこまで聞くとまたビンタがとんできた。
「行っちゃうの……？」
「…」
俺は無言でうなずく。
「そう……ならもう…あたし知らない！……勝手にして！」
目に思いっきり涙を浮かべながら、そう…呟いた。
「ごめん…。」
無言で立ちあがり、二階に上がって行った。
「……。」
俺は、なんて答えたらよかったんだろう。

◆

あたしは馬鹿だ…。
本当はすごくうれしかった…。
でも…また行っちゃう。
もう…行って欲しくない。
もう…あたしのそばから離れないでほしい。

「うぅ…うわぁぁぁあん！」

第１２話：腕輪

…俺はねぇちゃんの部屋の前に立っていた。

「…入るよ」

ノックをしてから入る。
ねぇちゃんはベッドに座っていた。
涙ぐみながら俺に話しかけてきた

「…本当に、また行くの？」
「……ごめん。」

俺は謝りたかった。
ただ…謝りたかった。
そして、もう一度謝ろうとした時。
俺の後ろから声がした。

「ふふ…。姉弟中が良いんですね。」
「え…」

ねぇちゃんの顔が引きつっている…
俺はだいたい予想がついていた。
だが…
いくら何でも…早すぎないか！

「だ…だれ……あなた誰！？どこから！？」

そこまで聞いて俺はある疑問を持った…。

「え…？ねぇちゃん…知らないの？」
「は…初めてだよ…て言うか誰！？どっから入ってきたの！？」
どういうことだ…？
じゃぁ…女って一体…。
「ふふ。大丈夫ですよ。貴女には手を出しません……ねぇ？」
そう言って女は俺の方を見た。
俺が行かなきゃ…殺すってことか…。
畜生…。
「…今から……行くのか…？」
「えぇ。」
そう言って、またあの扉を作り出す。
それを見てねぇちゃんは悟ったのか俺の腕を引っ張る。
「だめ！！行っちゃ…行っちゃだめ！！」
目に涙を浮かべながら…俺に叫ぶ。
でも…
「でも…俺は…行かなきゃならない。……ごめん。」
俺はねぇちゃんの手を振りほどき、そして中に入って行く。
ねぇちゃんが後ろで叫んでる…。
でも俺は振り向かずに…、ただ前も見つめ歩きだす。
もう一度…。

もう一度だけ、死線をくぐりに…。
そして、ねぇちゃんを守るために。

◆

「うぅぅ…なんで…何でぇ…」

泣き叫ぶ女…。
何でこんなにも人間は馬鹿なんだろう…。
貴女のために弟が闘っているというのに…。

「どうして、弟が行くのか…知りたいですか？」

私は、そう問いかけた。

「…」

女は黙って頷く。

「本当は…本当は貴女のはずだったんです。」
「え？」

私は一から説明した。
貴女を助けるために、弟が旅立つことを…。
そして、神葬の本当の地獄を…。

「う…うぅ…うわぁぁぁぁあん！！！」
「では、私はもう行きます。」

私は扉を作り、そして戻ろうとする。

が、私の歩みは女によって止められた。

「まって…」

「何か？」

「私も…私も行きたい……」

「…ふふ。」

人間は、本当に馬鹿だ…。

◆

ここは…

「前に居た場所と同じか…？」

俺が居たのは森の中だった。

前に居た場所と同じかは分らないが…

「ん？」

右腕を見てみると、手首になにやら腕輪が付いている。

なんだこれ…。

銀色の腕輪は液晶画面が付いている。

「うわ！！」

いきなり、腕輪から音が鳴りだした。

ピッピッピ…と。

まるで時限爆弾化のように。

「なな…なんだこれ！！？」

音がやんだかと思うと、液晶画面に文字が流れてきた。

『プレイヤーの皆さま、ようこそ。神葬の世界へ。二回目からは新たなルールがありますので、説明します。』

「新たな…ルール…」

『その名は【リンク】リンクされた状態でその中のどなたかがミッションをクリアすると、リンクしたプレイヤー全員がミッションクリアとなります。』

「マジかよ…」

『リンクのやり方はいたって簡単。まずは腕輪の端子をつなぎます。』

「端子…？これか」

見ると横の方にそれっぽいものが付いていた。

『2秒繋ぎますとリンクされます。…なを、現在のリンクしているプレイヤーなどは確認できませんのであしからず。』

そこまで文字が流れると一旦全て消えた。

そして、数秒後。

『ミッション？2　スケルトン１０頭の討伐／制限時間１６８ｈ』

第13話：骸骨

「スケルトン…って何だ？」

あいにく、俺はお化けとか神とかに詳しくない。
だからスケルトンとか言われても分らない…。

「一週間か……。」

今回は制限時間が長いな…
スケルトン…透けるとん？
もしかして透明な敵なのか？

「今は…美春だな。うん。」

俺は制限時間が長いことを考え、いまは美春を優先することにした。

「それにしてもリンクか…」

腕輪を見る。
リンク…。
今回からはこれが重要になるだろうな。

「よし。」

俺は目を瞑り、コンパスをイメージする。

「あっちの方角か…」

コンパスの針の方に向けて歩きだす。
本当にこの方向でいいのか分らないが、俺が信じれるものはこの『探』の力だけだ。
なら…行くしかない。

◆

「ていうか…」

理由は分らないがおかしい。
何がおかしいって腹が減らない…。
何も食べてないにもかかわらず、腹が減らない。

「この世界特有の何かか？」

なんてことを思いながら俺は歩いている。
歩きだして何分だろうか、一向に森から抜け出せない。

「…む。」

まだ小さくて分らないがざっざ…と誰かが歩いている音がする。
音からして1人じゃない…。

「まさか…人間！？…人間か！？」

俺は一旦コンパスを消し、音のする方に歩きだす。
自然とその歩みは速くなる。

「いや…いやいや…まてまて。」

俺はなに浮かれてんだ！
落ち付け。
一旦落ち付け。
フェンリルも森に居た…。
ってことはスケルトンとか言う奴が森に居る可能性もある。
それでもし見つかったら洒落にならない…。

「……何処かにいい場所は……。あそこが良いな。」

近くにあった少し太めの木に身を隠す。
そして、もう一度コンパスをだす。

「…これでスケルトンの位置もわかるのか？」

物は試しだ。
少し集中。そして念じてみる。
スケルトンの全体像は分からないが…恐らく四足歩行だろう。で、角があるに違いない。

「どうだ…？」

目を開いてみる。
すると、針が少しずつ…少しずつ動いている。

「おぉ！！……この方向は」

前より少し大きくなってる、脚音と同じ方向だ。
成功した！
俺は成功した…！

「いやいや…ちょっと待て…だとしたら。」
この『探』ってもしかしたらすごく便利じゃないのか？
敵の位置がわかるってことは倒したい時はいつでも倒せて逃げたい時はいつでも逃げれる…。
この世界で、生きる希望がすこしだけわいてきた…。

◆

「……あれがスケルトン…。」
身を隠してから3分後くらいだろうか…。
とうとうスケルトンの正体がわかった。
列をなし、歩いてくるあれがスケルトン…。
骸骨が盾と剣を持ってて、身長？はだいたい１７５くらいか。
数はそこまで多くないな…全部で…４体か。
俺はフェンリルの時、わずかなミスで死にかけた。
それを考え…今は奴らがすぎるのを待とう。
まだ奴らと俺との距離はだいたい８ｍはある。
「もう少し…奥に隠れよう…。」
そう思い、俺が動こうとした時。
スケルトンの居る方向から音が聞こえた！
見ると、奴らの一体がまるで笑ってるかのように口の骨をカタカタと動かしているのだ。
やばい！！見つかったか！？
と、思ったが違うようだ。
なぜなら。

『こいつらが…スケルトンですか……』

スケルトンの前方に1人の女が立っていたからだ。
手には一本の剣を持ち、身を構えている。

薄茶色の長い髪が風になびく。
女子にしては高めの身長。
俺の知らない制服だから…、他校か。

「覚悟しなさい！！」

女子が剣を振り上げ、スケルトンの一体に向かって走り出した…。

第１４話：圧倒

「ハァアアアア！！！」

彼女が剣を振り上げ、スケルトンの一体に斬りかかる。
が、しかし。
ガキィィ…ンと鈍い音を立て、防がれてしまう。

「なっ……！ならもう一度！」

一旦、剣を消したかと思うと今度は先ほどより細く、短い剣を出す。

「はぁっ！やあっっ！！」

先ほどの剣は力なら…
今の剣は早さ…
力こそないものも、その速さでスケルトンを圧倒する。
スケルトンの攻撃をかわし、体に叩き込む。

「す…すげぇ…」

俺は言葉が出なかった。
なぜ…
なぜ、怖くないんだ…

「はぁっ…はぁっ…これで……どうだぁっ！！」

もう一度、長い剣を出す。
そして、振りかぶり…

「はぁぁっ！！」

「なっ！？」

嘘だろ…

奴の…盾ごと、真っ二つにしやがった！

ガシャガシャと音を立てながら、スケルトンが一体崩れ落ちる。

「あと…3体！」

先ほどの闘いでコツをつかんだのか、今度も短い剣で圧倒していく。

そして、とどめは巨大な剣…。

その華麗な戦いに声が出なかった…。

◆

残すところ、1体となった頃、崩れ落ちて骨の塊となったスケルトンから音が聞こえてきた。

ガシャガシャと…

骨と骨とがぶつかりあい、そして…

一本の骨が宙に浮く。

「な…まさか…まさか…」

悪寒。

圧倒的悪寒。

できれば…当たってほしくなかった。

彼女も、その音に気が付いたのか後ろを振り向く。

「え…！？」

俺の…
予想が当たってしまった。
奴らが…死んでたはずの奴らが蘇った。
まるで、何事もなかったかのように蘇り、そして彼女を追い詰めていく。
そして…スケルトンの一体が盾で彼女を殴る。
遅い攻撃だったが彼女はよけれず…衝撃で吹っ飛ぶ。

「う……な…いや…止めて…」

そして、一体が彼女の脚を持ち、そのまま引きずっていく。

「やめっ…誰か！！助けて…！！」

剣で攻撃するが全く意に介さず、そのまま引きずっていく。
彼女の助けを求める声が聞こえてくる。

だめだ…
俺には助けれない…
無理だ…無理にきまってる……
倒せっこない
どうする…
このまま…逃げるか？
今逃げたら…気づかれない…
大丈夫だ…俺は生き延びる…大丈夫…

「助けて…！誰か…！」

本当は…
本当は助けたい…
俺だって助けたいんだ！
でも…でも…
無理だ…。俺には…俺には無理だ！

「たすけてぇえええええええ！！」

その悲鳴が聞こえた時、ある思い出がよみがえる…
美春が連れていかれ、何もできずただ見てるだけの俺…

何考えてんだ！！
助けろ！
助けなくてどうする！！
彼女を助けれるのは…救えれるのは俺だけだ！！
だったら迷うな！
恐れを捨てろ…！
恐怖を…絶望を乗り越えろ！！！

「う……うっおおおおおおお！！」

俺は走りだす。
もう迷いはない、名前も知らない彼女を助ける！

スケルトンの1体が俺に気づき、振り向いた。
だが、俺はその横をすり抜け引きずっている奴にとび蹴りをかます。

「！？」

派手にすっ飛び、その反動で彼女をつかんでいた手が離れる！

「大丈夫か！？」

俺は手を差し出し、彼女を立たせる。
何がなにやら分らない顔だ…
でも今は状況を説明してる暇はない！

「立て！！ここから逃げるぞっ！！！」
「は…はい！」

第１５話：逃亡

俺は彼女の手を引き、森の中を駆ける。

「はぁっ…はぁっ…まだ追ってきてるか！？」

彼女は後ろを振り向き、確認する。

「は…はい！まだ居ます！！」

「はぁっ…はぁっ…！」

倒れている木を飛び越え、草をかき分け、走る！

後ろでガシャガシャと音が聞こえる…

くそっ…！

思ったよりあいつら早い

依然として森の中を走る。

倒れている木を飛び越えようとした時

「キャァッ！」

「…！大丈夫か！？」

彼女がつまずき、転んでしまう！

「痛っ…！」

「手を！」

「は…はい！！」

さっきので奴らとの距離が大分狭くなった！
まだ安全圏だが、奴らをまける距離じゃない！！

「キャァっ…！！」

彼女が転んでしまう。
見ると、彼女の右足から血が出ている。
さっき転んだときに切ったのだろう…
痛そうに脚をおさえる。

「大丈夫か！？」

俺は手を伸ばすが彼女はその手をとろうとしない！

「…私のことは…もうほっといてください！！早く逃げて！！」
「できるか…できるかそんなこと！！」

そうしている間にスケルトン達がどんどん迫ってきている！

「くそっ…！生きることをあきらめるな！！いいから逃げるぞ！！！！」
「なっ…ん…」

俺は無理やり彼女の手をとり、引っ張る。

「はぁっ…はぁっ…！」

奴らとの距離がさっきより狭くなっている。
奴らには疲労ってないのかよ！

「どうすれば…どうすれば逃げれる…！！」

どうすれば…
安全な場所を…！！

「安全な場所…そうだ！！」

人が探せるなら…
『生物』が探せるなら『場所』も探せるはずだ！
いや…そうにきまってる！！

「早く！！早く針動けよ！！！！」

彼女をつかんでない方の手でコンパスを持つが一向に針が動かない。

「くそっ…！！！あいつらとの距離はどのくらいだ！？」
「はぁっ…はぁっ…１０ｍくらいです！！」
「くっそぉぉおおおっ！！！！」

早く針動けよ！！
早く！！早く早く！！

「うご……けえええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」

針を見るが…動かない…。
微動だにしない…。

「畜生…！」

いや……いや違う！！
動いている！！！
少しずつ動いている！！
俺たちから見て右側を針が示す！！
俺たちの生への道は開かれた！！

「あっちだ！！あっちに逃げるぞ！！」
「え？」
「いいから早く！！！」

本当に逃げれるのか、それはほとんど賭けだった。
俺と彼女は針が示す
『安全な場所』を目指し、走り続けた。

第16話：二人

「はぁっ…はぁっ…奴らは…見えるか！？」

俺の問に彼女が少し辺りを見てから答える。

「居ません…」

「よかった……」

俺たちは巨大な木の根に座っていた。

辺りには丈の長い草が生えている。

ここが本当に『安全な場所』かは分からないが、針はここを示している。

「助けていただき…ありがとうございました」

「そのことだけど…謝らなきゃいけない」

「え？」

「俺は…俺は君を…見捨てようとした…」

「？」

「俺は……俺は…君が…奴らと会ったときから…見ていた…でも…怖くて…助けれなかった…。」

目から涙があふれ出てくる。

「…そんなことですか？」

「え？」

「私は…本当ならあの時、死んでいました。」

あの時…

彼女が連れていかれようとしたときか…

「でも、私はこうして生きています。……それは、貴方のおかげです。」

「でも…俺は…」

「じゃぁ…どうして私が転んだ時、見捨てなかったんですか？」

「それは…」

「謝る理由なんてないんですよ？……貴方は私の命の恩人です。ありがとうございました。」

無垢な笑顔でそう言ってくれた…。

俺はその優しさに、涙出てきた。

「ちょっ…！どうして泣いてるんですか！」

「いや…何でもないよ。」

「もう…暗いですね。」

空を見るといつのまにか暗くなっていた。

時間は分らないが…7時くらいか…

「だな…」

「今日は…もう寝ましょう。」

「その前に…」

「？」

「名前は？」

「茜（あかね）…日向（ひなた）茜です。貴方は？」

「要、財部要だ。」

そのあと、俺たちはいつの間にか眠りについていた。

◆

要と茜が自己紹介をしているころ
フェンリルが出た場所とは違う草原に3人の少女が居た。
枝を拾い集めて燃やしそれを囲むように座っている。
つかの間の談笑。
話も弾み、笑い声が聞こえてくる。

「きゃはは！！おもしろーい！」

そう笑う彼女はこう…続けた。

「私…実は男なんだよねー。きゃはは！なんて。」

彼女のその言葉に、他の二人は笑顔を見せた。

第17話：援護

「ん……朝か…」

大きく伸びをする。

自己紹介の後、いつのまにか眠っていたようだ。

「日向…おは…」

居ない！？

そんな馬鹿な！！

「ひ…日向！！日向！！」

まさか…

まさかまさか

まさか！！

「日向ーー！！」

声を張り上げ、日向を呼ぶ。

が…しかし。

返事が来ない…。

「えへへ…すいません。」

「日向！？どこに…！」

木の陰から、日向が照れくさそうに顔を出してきた。

「あー…ちょっと顔を洗って来ました。」
そう言って、すまなそうに謝る。
「いや…ていうか、どこで顔を洗ってきたんだ？」
「ちょうど向こうに川があったんですよ。」
そう言って指をさす。
「案内しましょうか？」
「頼む…。水も飲みたいし」
じゃぁこっちに…と、草をかき分け、歩いて行く。
案外近いところに予想より大きな川があった。
俺たちは下まで降りる。
「ふーーー！…さっぱりしたぁー」
「でもこの水…飲めますかね？」
「どうだろ…まぁ、飲めるだろう。」
「ですね。」
俺たちは手に水をすくってのどを潤す。
この世界じゃ、腹は減らないけどのどはかわく…。
おいしい。
「いやー…ご迷惑おかけしてすいませんでした。」
「いや…とにかく…無事でよかった…。今日はどうする？」

そうですねー。
と、何か考えるようなしぐさをする。
「……一旦、能力の紹介しておきませんか？」
「…そうだな。」
俺たちは上まで上がり、木の根っこに座る。
「じゃぁ…まず俺から。」
俺は『探』のプレートを見せながら説明をする。
「俺の能力は『探』…簡単に言うと人の位置や、場所がわかる能力だ。」
そう言いながら、俺は日向を念じる。
すると、コンパスの針の位置が日向の方向にすー…と動く。
初めのうちはなれなかったが、いまでは得意になってきた。
「こういう感じに…針が動く。」
コンパスを日向の周りで動かす。
すると、俺の手の動きに合わせて、針も動く。
「おーーー。すごいですね。でも、どうしてスケルトン達から逃げれたんですか？」
「それは…『安全な場所』を探し続けた…からかな？俺もとっさにやったから…よく。」
「なるほど。」

そう言って、日向はまた水を飲む。

「私の能力は、もう知ってるかもですけど…『剣』です。」

そう言って『剣』のプレートを見せてくれた。
色は俺と同じだが、もちろん形状は違う。

「今は…まだ二本しか出せませんが…。中学校まで剣道をやっていたので。」

長く太い剣と。
細く短い剣を出して見せる。

「ちなみに…出せるのは一本まで見たいです。」
「なるほど…」

そこまで聞いて俺はある大事なことを思い出した。

「なぁ…もしよかったらでいいんだけど…」
「？」
「リンク…しないか？」

俺の言葉を聞いて、はっ！と驚く。
まだよくわからないが…多分、日向はおっちょこちょいとでも言うのか…天然とでもいうのか…。

「そうですね！やりましょう！」

そう言って腕輪を前に出してくる。
俺も端子が合うように腕輪を出す。

「これで…いいのか？」

数秒、繋ぐと。

液晶画面にメッセージが流れてきた。

『リンク完了』

「おお！！！」

「できましたーー！」

お互いに腕輪を掲げ、喜ぶ。

が…少し冷静になり、お互い高校生なことを思い出し、照れ笑う。

その時、俺たちの後ろから音が聞こえてきた。

カタカタと何かと何かがぶつかりあう…あの音が。

「危ない！！」

日向が俺を突き飛ばす。

ガキィィン！！

俺と日向の間に、剣が振り下ろされる。

振り下ろした正体はまだ姿が見えないが…もう分っている。

今、俺が知っている剣を使うのは二種類…
一つは、俺の前に居る日向。
そしてもう一つは…。

「くそっ！！……逃げるぞ！」
俺は剣を飛び越え、日向の手を取る。
目の前は川、後ろが森。
コンパスが示す『安全な場所』は川の方向。
川は渡れない…となったら。

「こっちだ！！」
川沿いを走る！
手を引きながらコンパスを確認するが、やはり川の向こう。
だめだ…！役に立たない！
「こっちだ！！早く！！」
森の中と違って障害物はないが、その反面後ろから追ってきている
スケルトンも俺たちを見失わない。
「はぁっ…はぁっ…！……！！」

日向が何かに気づいたようだ。

「どうした！！？」

「前！！」

「え？……うおっ！」

危なかった、間一髪。

俺の前にもスケルトンが一体居やがった。

「はぁっ…はぁっ…！くそっ！こっちだ！」

川沿いはあきらめて、森の中に入ろうとする…。

が！！

「なぁ！！？」

森の中にも奴らは居る！

畜生…！囲まれた！

カタカタと俺たちをあざ笑うように奴らは徐々に追い詰めてくる。

距離を確実に詰めながら、剣を一体が振り下ろしてきた！！

くそっ…！

もうだめなのか！？

「あきらめないで！」

「なっ！？」

目の前に、剣を構えた日向が立っていた。

俺への攻撃をギリギリのところで受け止めている。

「はやく！早く逃げてください！！」

「できるわけないだろ！！」

そうしている間に、他のスケルトンが剣を振りおろす。

畜生…！

俺は誰も守れないのかよ！！

「畜生ぉぉおおおおおおおおおおおおお！！！」

悔しさでたまらず叫ぶ。

その瞬間。

どこからか、声が聞こえてきた。

「ｓｈｏｔ！」

パシュン…という音がしたかと思うと、日向に切りかかっていたスケルトンの顔に大きな穴が開く。

いや…もともと穴は開いているが、脳の辺りに穴が開いた。

そして。

穴が開いたかと思うと、がしゃがしゃと音を立て、崩れ落ちてゆく。

「お二人さん？闘わないと…死んじゃうぜ？」

第１８話：仲間

「え？」

振り向いて見るが、誰もいない。
何だ！？
何が起こった！？

「ほらほら…お二人さん、よそ見してたら死んじゃうぜ？」

その言葉が聞こえ、振り返ってみるとスケルトンが剣を振りおろそうとしている！

「危ない！」

間一髪で日向を助ける、が…
スケルトン達はカタカタと音を鳴らしながら近づいてくる。

「闘わないと…死んじゃうぜ？……ｓｈｏｔ！」

パシュンッ
とまた乾いた音がしたかと思うと、一体が崩れ落ちる。

何だ！？
目の前で何が起こってる！？

「…ｓｈｏｔ！」

またしても崩れ落ちるスケルトン…

「後一体だな…ｓｈｏｔ！」

パシュンッ…

最後の一体もあっけなく崩れ落ちる。

「はぁっ…はぁっ…何が…一体…何が……この穴は…」

「はは…驚かしちゃったかい？」

声のした方を見ると、１人の女性が立っている。

立って…居る？

「な！？」

おいおい！

立ってる場所は川の上だぞ！？

「？」

「おば…おば…おばけ…」

「はは、お嬢さん助けたのにお化け扱いはないだろう？」

そう言って女性が近づいてくる。

川の上に立ちながら。

「よぉ、大丈夫かい？お二人さん。」
俺たちの近くまで来て笑顔で手を出してくるが…。
怖くて手が出せない。

「どうしたんだい？怪我でもしたのかい？」
「い…いや…そうじゃ…」
「か、川の上に立ってましたよね…？もしかしてもしかすると本当にお化け…」
「そんなわけないだろう？ほら、これだよこれ。」
そう言って一つのプレートを見せてくれた。
なるほど、何かの能力なのか。

「『壁』って言う能力で私の半径…そうだな、１．５ｍくらいならどこでも壁が出せる能力だ。わかったかい？」
なるほど、それでか。
いや…じゃぁ。
スケルトン達を倒したのは何だったんだ？

「じゃぁ…スケ」
「スケルトン達を倒せたのはなぜですか？」
「んー？それはこっちの能力さ。」
そう言ってもう一つプレートを見せる。
「え！？」
「ふ…二つ！？」

何かおかしいことでも？と首をかしげている。

「いやいやいや！待てよ！何で２個も…」

「１人１つじゃないんですか！？」

「あぁー…お二人さんは知らないのかい？実はこれ、１人何個でも所持できるんだよ。」

「！？」

「まぁ…知らないのも無理はないか。こっちは『銃』文字通り、銃が出せる能力。わかったかい？」

１人何個でも持てるのか…

知らなかった…。

て言うか、氷室教えてくれよ。

なんて思っていると、日向が女性に聞いた。

「あの…お名前は？」

「私かい？」

「はい。」

「私は、水穂百合（みずのゆり）。お嬢さんは？」

「日向です。日向茜。」

「かわいい名前じゃないか。そっちは？」

「お、俺？」

急に振られて一瞬驚いたが。

「財部要。」
「なるほど、おふたりさん、これからよろしく頼むぜ？」
そう言って腕輪を出してきた。
「？」
「リンクしないのかい？」
「あぁ！リンクか！すっかり忘れてた！」
俺も腕輪を出す。
そうか…何人でもよかったんだ。
「よし。じゃぁお嬢さんも」
「はい。」
「…あ！」
日向が何か思い出したように声を出す。
「ん？」
「どうしたんだい？」
あわあわと顔が引きつっていく…。
「大変です！このままじゃあのスケルトン達復活します！」
ヤバい！
ヤバいヤバいヤバい！

ソレを忘れてた！
早く…早くこの場所から逃げないと！

「はは。お嬢さんは何を言っているんだい？もうコアは壊したじゃないか」

「こ…こあ…？」

「あれ、お二人さんは何も知らないのかい？コアを壊さないと怪物は死なないんだぜ？」

まるで当たり前のように言う。
はじめて聞いた…というより。コアって何だよ！

「その…コアて何ですか？」
「コアって言うのは、人間でいうところの心臓で、ソレを壊さないと復活するんだぜ？」
「なるほど…道理で。」
「はは、私も最初は知らなかったさ。」

ところで…。
と、言葉を続け

「少し、休憩しないかい？」
「そうだな…。」
「分りました。」

◆

俺たちは森を少し歩き、開けた場所に腰を下ろした。

近くには何もなく、見晴らしが良い。
「ふー…ところで、お二人さんは何体倒したんだい？」
俺たちは顔を見合わせる。
正直なところ言いにくかった。
が、俺達はコアの存在を知らなかったし当然と言えば当然だが…
「ぜ…」
「ぜ？」
「ゼロ…」
「えぇ！？」
「いや…コアの存在知らなかったから…」
「ははは。なるほど。」
「水野さんは…何体ですか？」
「私かい？私は…さっきので８かな。」
「８ぃ！？」
「おぉ…大声出したら驚くじゃないか…」
「す、すいません…。」
強いとは思っていたが…まさかそれほどとは。
「お二人さん、このぐらいで驚いていたらこの先生きていけないぜ？」
「え…？どういう」
「まぁ、私はある人から聞いたんだけど、ドラゴンとか出てくるらしいぜ？」
「ドラゴン…。」
「まぁ、そいつの名前は氷室って言うんだけどな。」

へー…
氷室って言うのか…

氷室…
氷室！？

「氷室！？…もしかして、氷室雪…？」
「あれ…知ってるのかい？」

知ってるも何も…。

「まぁ、あったことは。」
「なるほど…。まぁ…コレは置いておこう。」
「？」
「こっちの話しさ。」

「もう、空が暗くなりかけてるし、寝ないかい？」
「そうですね。…私疲れちゃいました。」
「よし。…要、お前はあっちで寝るんだ。」
「え…何で俺だけ…」
「私たちは、女子じゃないか」

「…わかった。」

「はは。襲ったら撃つぜ？」
「襲わねぇよ！？」

「はは、おやすみ。」
「おやすみなさーい。」
「…おやすみ。」

俺は1人で寝る。
そう言えば…日向と一緒に寝ちゃったな…、なんか恥ずかしい。
て言うか…なんか水野…ねえちゃんと似てる…性格とか。

第19話：作戦

「朝か…。」

これで3日め…か？
まだ時間はたくさんあるな…。
あれ…皆居ない…。

「…そっか、俺1人で寝たんだった。」

二人のところへ向かうとまだ二人は寝ていた。

寝息を立てながら寝ている。
起こすのも悪いかと思い、近くに座っていると。

「…ふぁー……」

先に目を覚ましたのは水野だった。

「…あ。」
「おや…早いじゃないか」
「いや…さっき起きたばかりだけど。」
「なるほど、起きてすぐ私たちのところに来たのかい…まさか。」
「いやいやいや。何もしてないから！」
「はは。」

「あれ、皆さんおはようございます。」
「あぁ、おはよう」
「おはよう。それより茜、要がな」

「何もしてないって！」
「？」

「それより、今日はどうする？」
「んー…私がもう8だから…今日中にミッションをクリアしないかい？」
「おぉ！」
「そうですねー。」

俺たちは0だけど、リンクしたことによって後2体でクリアか。
闘えない俺としては嬉しい限りだ。
もしかして、このリンクって…俺みたいなやつをクリアさせるのが目的…？

「でも、まぁ。今日は敵を探して終るんじゃないかい？」
「ん？どうして？」
「どうしてって…あいつらなかなか見つからないじゃないかい」
「「え」」

おいおい…マジかよ。
俺達、めちゃくちゃ合ってきたんが…。

「はは、運が悪いじゃないか。まぁ、探せば見つけれるだろう。」
「いや…探す必要ない。」
「？」
「あ、そっか。俺の能力言ってなかったんだ。」

俺は探のプレートを見せながら説明する。

「俺の能力は『探』…簡単に言うと人を探したり、場所を探したり

できる能力。」
「ほー。良い能力じゃないかい。」
自分の能力をほめられるのはなんだか嬉しい。
「あ、ちなみに私は『剣』です。」
「予想はしていたが、やはり剣か。…ん？ってことはもしかして、要だけ戦えないのかい？」
「…」
俺は無言でうなずく。
「はは…。まぁ、便利な能力だし……」
「つまりは男の子なのに女の子に闘ってもらうってわけか。面目丸潰れじゃないかい？」
「言うな…。」
「よし、じゃぁ早速敵が居る場所へ案内頼むぜ？」
「あの…作戦とか、立てないんですか？」
「作戦か―…よし。ちょっと考えるぜ。」
腕を組み、考える水野。
「よし。決まった！少し聞いてくれないかい？」
そう言って作戦を話し始めた。
簡単にまとめると…。
1、俺が『探』で敵を探す。
2、撃つ

「え…それだけ？」
「それだけ。」
「あのー…私の出番は？」
「茜は…実戦で戦えるようにならないとだから、闘ってもらうんだぜ？」
「なるほど…。」

「よし、なら。行こうじゃないか。私たちの戦場へ！」

そう言ってライフルを出す。

「水野さんってどうして『銃』ていう能力にしたんですか？」
「んー…？父親が銃を集めるのが趣味でね、私も撃たせてもらってたのさ。」
「なるほどー。」

いや…それ、銃刀法違反じゃ…。
って思ったが聞かないでおこう。

「よし、…あっちの方向だ。」

俺はコンパスを出し、針が刺す方向に歩きだす。
俺の後ろから二人は付いてくる。
水野はライフルを、日向は剣を持ちながら。

第２０話：討伐

「おーい。まだ見つけれないのかい？」
「うーん…。こっちであってんだけどな…。」
俺たちは森を抜け、草原を歩いて行る。
コンパスの針はこっちで合ってるんだけど…
「…ちょっと休憩しませんか？」
「仕方ない…そうしようじゃないか。」
俺たちは草原に腰を下ろす。
今まで、森の中だったから日光と風が気持ちいい。
「ふー…。にしても…その銃でかいですね…」
「ん？あぁ。これはＨ＆ａｍｐ；Ｋ　ＰＳＧ１っていってな…」
「えいちあんどけー…？」
「…説明したら長くなるからやめておこうか。」
「はい。」
「…ミッション終了まであとどれくらいだろう」
「私はわかんないが…まだ時間はたっぷりあるんじゃないかい？」
「どうかしたんですか？」
「…ん？あぁ、こっちの話だから…大丈夫。」
美春…
今回は美春を見つけれるのだろうか…
「さて、お二人さん。そろそろ行こうじゃないか。」

「あぁ。…あっちだ。」

時間的には昼だろうか、俺たちは草原をただひたすら歩き続けた…。

◆

「…居た。」

「何体いますか？」

俺達から距離にして６０ｍくらい…か？

数は分らないが奴らは居た。

「よし…。じゃぁお二人さん、作戦をもう一度説明するぜ？」

「あぁ。」

「まず…要、お前の仕事は他にスケルトンが来ないか見張ってるんだ。」

「わかった。」

「よし、そして次に茜、お前は剣を出して『闘い方』を実戦で学ぶんだ。…まぁ私がサポートするから大丈夫だとは思うぜ。」

「はい！」

「よし…じゃぁ…奴らのコアの場所だが…ズバリ頭だぜそこを壊すんだ。わかったかい？」

「はい！」

「良い返事じゃないか…よし。行こう！」

水野の作戦通り、まず茜が奴らに気づかれないように近づく…。

見晴らしが良いぶん、見失わないが逆に見つかる可能性もある。

慎重に…少しづつ。

「じゃぁ私もそろそろ準備しようかな…っと。」

そう言うと俺の横でライフル…H&K　PSG1?を具現化する。
そして、草原にうつぶせで寝ころび、スコープを覗き込む。

「ふー…胸がきついぜ…」

男子の隣でなんてことを!?

っと…俺の仕事は見張りだ。
しっかり見てなくては。

「どうだ…他に来ないか?」
「あぁ。大丈夫だ。」

―――ここから茜視点です。―――

「はぁっ…はぁっ…」

緊張しているのが自分でもわかる…。
今私の前に居るのは全部で3体。
剣を握る手が、体を支える脚が震える

「よし…大丈夫…」

気づかれていない。
大丈夫…大丈夫…
と自分自身に言い聞かせる。

確か…頭にコアがある…んだよね?

「……よし。」

まだ、まだ遠い…
もっと近くによって…それから。

それから…

「大丈夫…。」

来た。
この距離、この距離が私のギリギリ。

「たぁっ！！」

持っていた剣を一番後ろの頭に突き刺す。
日本刀は本来斬るではなく突くのが目的。

カタカタ…カタ…

「やった！」

倒せた、1体は無事倒せた！
力なく崩れ落ちる、一体。
だけど…
他に2体も居る。

「大丈夫…大丈夫…。」

数歩下がり、今度は短剣を出す。

速さで、倒す！

「…！」

スケルトンの一体が剣を横に振ってきた。
それをすんでのところで後ろに飛びかわす。
大丈夫。
冷静になれば避けれる。

スケルトンは力はあるけど…技術がない。
大丈夫…。
剣道全国一位。
それは…伊達じゃない！

「たぁっ！やぁっ…！……やぁぁっ！！」

一体に狙いを付け、連続で攻撃する。
狙うのはもちろん頭だけど、頭だけ気を付けてたら危ないから…。

剣を振りおろしすきに背後に回り込み。
そして、一撃。

「たぁっ！！！……え！？」

そんな…馬鹿な！！！

あと一撃。
ってところでかわされた！

「……きゃぁっ！」

痛っ…

何が…！？

見るともう一体が横に立っていた。

「う……」

盾で殴られたのかな…

ってそんなことを考えてる場合じゃない！

闘わないと…

「っ…はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

がんばって闘うが…

徐々に優劣が変わってくる…

それも当たり前か、さっきからおなかのあたりが痛い…

「……！」

もう一度盾で攻撃される！

寸前のところで大剣を出してガードするけど…

「…きゃぁっ！」

だめ…！

「……！」

見あげると一体が剣を振りおろそうとしている…
私、このまま死んじゃうのかな…。
その時
「ｓｈｏｔォ！！！」
「え…」
パシュンッ
ガシャガシャとその場に崩れ落ちるスケルトン…
おかげで私は助かった。
だけど…何が？
「日向ぁあああ！！大丈夫かーーー！！」
「……あ。」
そうだ…私は1人じゃないんだった…。
私には、大事な仲間が、居たんだ。
「ｓｈｏｔォ！！」
「え？」
そうだった…もう1体…
あ、…財部君がこっちに来てる…

◆―――此処から要視点―――

「おい…大丈夫か？」

「……ん」

「いやー…急に倒れたから、心配したけど…大丈夫か？」

「う…。うわぁあああああん」

俺が駆け付けた時、日向が倒れたから…心配したが…。

無事そうで良かった。

「怖かったかい？」

「…はい……」

「そうか……それはすまなかったぜ…」

「いえ…。もう大丈夫です。」

「……。私、1体倒せました。でも……それから…」

「一体倒せたならすごいと思う。…て俺が言うのもあれだけど。」

「えへへ…。」

「そう言えば…ミッション」

「そうだ…！ミッションはクリアーしたはずだぞ！」

腕輪を見るけどメッセージが流れてこない…。

おかしい…。

少し待ってみるが何も流れてこない。

何が…

「…お二人さん、まだ見たいだぜ？」

「え？」

水野が指差した方向を見ると、２体が立ちあがっている。
何でだ！？

「どうやら…しとめそこなったらしいぜ…。」

そう言ってまたあのライフルを出す。
が、水野に日向が…こうつぶやいた。

「…行きます。」
「え？」

「私が…、私がいきます！」
「でも……」
「大丈夫です！」

「そうか…よし。がんばれ。」

「はい！！」

日向がもう一度戦場へ歩んで行く。
俺はなぜか涙が出てきた。

「どうして泣いてるんだい？」
「…分らない。」
「はは…悔し涙かな？」

「……」

悔し涙、か。

確かに…俺だけ闘えず、ただ見守るだけだ…

畜生。

俺も戦える方法を学ばなくちゃ…

◆

ピッピッピ…

「ん？」

腕輪から音がしている。

…と、言うことは。

『ミッション？２　クリア』

「よっしゃあああ！！！」

腕を上げて喜んでいると。

「ｓｈｏｔ！……」

第21話：目的

「たっく…詰めが甘いぜ？」
「えへへ……すいません…」
「とにかく…よかったぜ。」
「ありがとうございます。」

どうやら、一体倒して油断していたらしい…。
目に涙を浮かべている。
嬉し泣きだろうか…それとも…

「ようやく…クリアできましたね。」
「あぁ…。」

これで、今回のミッションが終わった…。

「やっと帰れるな。」
「そうですね……」
「じゃぁ、お二人さん。私はここでおさらばするぜ」
「え？」
「どうやら迎えが来ちゃったみたいだからな」
水野が指差した先には、見なれたドアがあった。
なるほど…。

「こちらへ。」

そう言って出てきたのは、俺の知らない男だった。

まぁ…当然と逝っちゃ当然なんだが…。

「じゃっ…お二人さん、元気で！また会おうぜ！」

そう言って右手を軽く上げ、ドアの中に入っていく。

「行っちゃいましたね…。」

「あぁ。」

「今回は…ありがとうございました。」

「気にするな…それに助かったのは、水野のおかげでもあるんだし…。」

水野が居なかったことを考えると…。

「…日向さん。」

俺と、日向とも違う声が後ろからする…。

そうか、日向にも迎えが来たのか。

「じゃぁ…私も行きますね。」

「あぁ。元気で。」

「財部君も。」

俺たちは互いに握手し、そして別れる。

「1人か…。」

何で俺には迎えが来ないんだよ。

数分、待ったが来ない。

おかしい…、おかしい。

「いやいやいや！何でだ！？何で…」

まさか…ほんとうはリンク失敗していたとか！？
いや…そんなことは、ちゃんと完了って出てたし…。

「お待たせして、すいません。」
「…。」
「さぁ、どうぞこちらへ。」

女はそう言ってドアを出す。
が、俺は入ろうとせず。

「一つ、いいか…？」
「？」
「このゲーム…神葬の目的…って何だ？」
「目的、ですか？」
「あぁ…こんな、人が平気で死ぬゲーム…それの目的。」

その質問に、女はすこし黙った後。
こう…答えた。

「そうですね、あまり詳しくは言えないのですが…。貴方が今居る世界、つまり…此処は何処だと思います？」
「は…？それは…神葬の」
「本当にそうお思いで？」
「え…」
「……まぁ、場所は置いておきましょう、なぜ神を殺すのか…？ですよね」

「あぁ。」
「最初から、この世界には神が居たわけではありません。いつのまにか神々は居ました。そして、驚異的な力でこの世界を少しずつ…少しずつ、侵略していったのです。」
そこまで言った後、少し間を置き。
「この世界を、神々の手から守る…。簡単に言うと、それがプレイヤーの目的です。」
「なっ……」
「さぁ、私の口から言えるのは此処までです。どうぞ中へ」
「…ありがとう。」
俺はドアの中へ入っていく。
この世界を…守る…。
この世界は…一体何だ…
「…言って、よかったですか?」
要がドアの中へ入った後、女の横にはあの男が居た。
「あぁ…いずれ、全てのプレイヤーが知ることになる。」
「そうですが…。」
「まぁ…次で半分は…いや、それ以上は死ぬだろうが…。」

第3章までの登場キャラクター紹介

財部要（たからべかなめ）
性別：男　年齢：17歳　身長：170
一人称：「俺」二人称：「名字」
能力：『探』
・本作の主人公
・普通の高校生
・姉と二人暮らし
・運動部
・さらさらヘアー、眉毛隠れるくらいの長さ
・幼馴染の長門美春を連れ戻すため、姉を助けるために「神葬」の世界へ旅立った

財部千華（たからべちか）
性別：女　年齢：18　身長：167
一人称：「私」　二人称：「（名前）、（あだ名）」
能力：無し
・要の姉
・料理が下手
・ヘアピン集めが趣味
・要とは違う高校
・12話『腕輪』で女に神葬の世界に行きたいと、言っていたが、詳細は不明

長門美春
性別：女　年齢：17　身長：164
一人称「あたし」　二人称「あだな」
能力：不明

・要の幼馴染
・うざ可愛い
・通称「みはるん」
・１話『少女』で神葬の世界に連れて行かれる
・口癖は「～。なんて。」「～。なーんて。」

氷室雪
性別：女　年齢：１７　身長：１６６
一人称：「私」　二人称：「（名字）君、さん」
能力：『氷』
・神葬の生還者であり、クリアした人
・委員長的なイメージ
・メガネ（深緑のふち色）
・プレートの色は白
・水野と知り合いっぽいが詳細は不明

茶髪の男
性別：男　年齢：不明　身長：１７２
一人称：「俺」
能力：不明
・フェンリルに食べられた人１号
・お調子者
・右腕食べられた

木原結城
性別：男　年齢：不明　身長：１７０
一人称：「俺」
能力：『蘇』
・プレート狩りの男にプレートを奪われた後、針で殺された
・フェンリルに食べられた

・いろいろとかわいそう

プレート狩りの男
性別：男　年齢：不明　身長：１６８
一人称：「俺」
能力：『針』『蘇』など９個所持
・死者のプレートを集めていた
・『１人何個でも所持可能』にいち早く気づいた
・『神を殺して神になる』とか言ってる
・針も蘇も彼の元もとの能力ではない
・人をイラつかせる敬語

日向茜
性別：女　年齢：１７　身長：１６５
一人称：「私」　ニ人称：「（名字）君、さん」
能力：『剣』
・剣道をやっていた
・敬語
・髪は肩にかかるくらい
・ストレートヘアー
・耳にかからないようにヘアピンしている
・要、とは違う高校

水野百合
性別：女　年齢：１８　身長：１６９
一人称：「私」　ニ人称：「名前」例外で「お嬢さん」なども
能力：『銃』『壁』
・スタイルぱねぇ
・スケルトンから要と茜を助けた
・きょぬー

・銃は小さいころから撃っていた
・主に使用する銃はセミオートマティックライフルのＨ＆ａｍｐ；Ｋ　ＰＳＧ１
・口癖は「～かい？」「～だぜ？」「～じゃないかい？」

祝！アクセス数１，０００！

皆さん、こんにちは。

作者のましろです。

今日の午後アクセス数をみてみたところ

なな…なんと！

１０００超えてました！

ＦＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！

一瞬我が目を疑いました。

実はこれ…１００なんじゃ…って。

最初書き始めた時は、まさかここまで話が続くとは思ってませんでした…。

ここまでがんばってかけたのも、皆さまのおかげだと思います。

話の内容がわかりにくかったり
誤字があったり
どのキャラクターが喋ってるのか分らなかったり
更新日時がバラバラだったり

改善点ばかり…

というか、改善点しかありませんがこれからもがんばって書いて行こうと思います。

これからも
「神葬」をよろしくおねがいします
ましろ。

第２２話：姉弟

「…ここは。」

何処か、懐かしい場所。
それと同時に、心から安心できる場所。

「あ…。」

そうだ、此処は俺の家。

「姉えちゃん！！ただいま！！」

俺は姉ちゃんの部屋に入る。
嬉しさのあまり、ノックもせずに。

「か…要…！！！」
「姉ちゃん！ただいま」
「う…うぅ…うわあああん！」

俺を見るやいなや、姉ちゃんは大きな声で泣き出した。
それを見て、俺の目からも涙が出る。
止まらなかった。
止めれるわけがなかった。

「おかえり、心配…したよ。ぐす…。」
「ありがとう。」

まだ泣いてる。

「待っても、待っても帰ってこないから…私、私…うわぁあああん！」
「言ったろ…？ちゃんと戻ってくるって。」
「うわあああああん！」

◆

「さぁ！お姉ちゃんのすぺさる料理を食べるんだ！」
「お…おぅ。」
「む？何か？」
「いや…何でもない。」

泣きやんだ後、姉ちゃんは近くのスーパーで食材を買ってきて、料理を作り出した。
手伝おうとしたが、キッチンは妻の聖域らしい。
結婚してないのに。

そして、肝心の料理だが…。
まぁ、予想はしていた。
予想はしていたが。

「たーんとお食べ」
「お……おぅ…いただきます。」

無い胸を張りながら、ドヤ顔で見ている。
昔の俺ならうざい…とでも思ったのだろうか。
今では可愛く見える…。

困ったものだ。

「どう？どう？」

「……うん……まぁ…おいしい…。」

「えっへん！」

本当はまずい。

まずい…けど、なんだろう。

涙が出てくる。

「あれ…なんで泣いてるの？」

「…嬉しくて。……かな。」

「…弟じゃなかったら……」

「？」

「襲ってたのに。」

「止めろ、台無しじゃねぇか。」

「えへへ…嘘だよ。私もうれしい。おかえり。」

「ただいま。」

第２３話：疑問

俺は朝、ある家の前に居た。
一度しか来たことはないが、場所は覚えてる。
俺が神葬について知った場所…氷室雪の家だ。

ピンポーン

「はーい…あら、貴方…確か。」
「ちょっと、聞きたいことがあって。」
「……そう。まぁ良いわ、入って。」
「お邪魔します。」

◆

「紅茶でいいわよね？」
「あぁ。」
「はい。」
「ありがとう。」

俺と氷室はテーブルを挟み、向かい合って座る。
一口、紅茶を飲み質問をする。

「単刀直入に言うが…」
「何かしら？」
「…俺が一回目の神葬から戻ってきたとき……。姉ちゃんに会ったか？」
しばらく沈黙が続く。

氷室を紅茶を飲み、続けた。

「ふぅ…どうしてそう、思ったのかしら？」

「姉ちゃんが、女が来て俺が帰ってきたことを聞いた…って言っていた。が…神葬にワープさせる女じゃなかった。」

「それで、どうして私なのかしら…。他にも女はいっぱいいるじゃない。」

「…。」

「終わりね…時間の無駄だったわ。」

そう言って、立ち上がろうとする。

「おい、待てよ…。もう一ついいか…？」

「まだ何かあるの？」

俺は2回目の神葬で会ったある人物を思い出す。

「氷室は、水野とどういう関係だ？」

―――「まぁ、そいつの名前は氷室って言うんだけどな。」

「水野…あぁ、狙撃手（スナイパー）の…。」

「あぁ、どういう関係なんだ？」

「簡単なことよ…私と同じクラスなの。」

思っていたより、簡単な答えで拍子抜けする。

「なんだ…そうだったのか…。」

「えぇ。何だと思ったの？」

「いや…。」

「そう、彼女にも言ったけど…3回目から『本物』が出てくるわよ」
「本物？」
「えぇ、正真正銘本物の神。」
「そうか…ありがとう。」
「気にしないで、それより…私も聞きたいことがあるの。いいかしら？」
「ん？」

紅茶を一口飲み、こう…続けた。

「プレイヤー狩りの男…って知ってる？」
「いや…なんだ…それ？」
「…そう、知らないのね。」

じゃぁ、説明するわ。と、続ける。

「本名は…朝長標（ともながしるべ）」
「…そいつが？」

「彼だけは…彼だけは気をつけた方が良いわ。」
「一体、何が」
「彼の能力は『奪』……他のプレイヤーの能力…つまりプレートを奪ってるの。」
「はぁ！？」
「驚いても無理はないわね…。」
「そりゃそうだ。第一、他人のプレートを奪って何の利益が」

「あるじゃない。」
「え…」

「使える能力が増える…」
「あ…。」
「彼はそれを利用し…プレイヤーを殺して回ってるの。」
「そんな…馬鹿な…」
「いいえ。あるわ。…気を付けてね。」

◆

「さて…は私から言えるのはもうこのぐらいね。」
「…助かった。」
「えぇ。…そう言えば」
「？」
「貴方の…能力は？」
「『探』だ。」
「探す……そう言えば、お友達を探してるんだったわね。」
「あぁ…。」

氷室が何か言おうと口を開いた。
が…何も言うことなく、そのまま口だけをニヤリとする…。
見ているのは俺じゃなくて…俺の後ろ。

「あら…久しぶりね。」
「お久しぶりです。氷室様。」

そう言って、出てきたのはあの女…。

「まったく…、人の家に土足で…。」
「ふふ、すいません。」
「まぁ…良いわ。それより、今日は何の用？」

「氷室様に用はありません…あるのは」
「…。」

口元を吊りあげ、こう続ける。

「ふふ…もうお分かりのようで。」
「行く前に…姉ちゃんに会わせろ。」
「んー…まぁ、良いでしょう。どうぞ…この中へ。」

そう言って、扉を開ける。
本当に、この中に入って大丈夫なのだろうか…

「心配なさらず…、ちゃんと送りますから。」

第２４話：姉弟　２

「…ここは」

俺は胸をなでおろす…

よかった。

俺の家だ。

「ふふ…」

俺の後ろから声がする。

「どうしたんです？早くお姉さんのところに行かれては？」

「言われなくても…そうする。」

俺は姉ちゃんの部屋に行く。

ノックする手が震えてる…。

「姉ちゃん…。」

「…あ」

姉ちゃんの視線は俺の後ろ…。

そうか。

前もあったことがあったんだった。

なら…もう…。

「…今まで、ごめんね。」

「え？」

俺は一瞬分らなかった。
「私…全然知らなかった。」
何を言っている…。
姉ちゃんは一体何を…。
「何を…」
その時、俺の後ろから笑い声が聞こえた。
「…ふふっ。」
小さく笑った女はこう、続けた。
「どうしても…とおっしゃるので、教えました。」
「え？」
「神葬のことを…。」
目の前が真っ暗になり、頭が真っ白になる。
何を言ってるのか分からなかった。
「……ごめんね。今まで何も知らずに…。」
「姉ちゃんは…姉ちゃんは悪くない！！」
姉ちゃんは泣いている…。
それもそうか。
自分のために弟が死ぬかもしれないんだから…。

「さぁっ！もう終わりです…。」

女が俺の手を引き、無理やり中に連れて行こうとする。

「おい！やめろ…！やめろぉおお！！！」

俺はまだ姉ちゃんに言いたいこととか伝えたいこと…それがいっぱいあるのに…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0873z/

?神葬?

2012年1月6日11時29分発行